



三
月

パストラル尼崎

弥
生

No.118, 2022(R4)年2月25日

〔編集・発行〕

パストラル尼崎

尼崎市潮江1丁目10-2

Tel. 06-6493-0521

Fax. 06-6493-0301

発行責任者：峰田 康弘

◆3月の歳時記◆

「3月2日は遠山の金さんの日」



「この桜吹雪が目に入らぬか」でお馴染みの「遠山の金さん」。その金さんにモデルがいたのはご存知でしょうか？その名も北町奉行「遠山左衛門尉影元」。3月2日は金さんが北町奉行に任命された日だそうです。どんな人物だったのかその実像に迫ります。

遠山の金さんといえば、日頃は遊び人に身をやつし、街に蔓延る悪党をスパーマンのようになぎ倒し、金さんの本来の職場、お白州では、シラを切る悪党に「おうおう」と急にべらんめい調になるや歌舞伎役者顔負けに見栄を切り、片肌ぬぎつつ桜吹雪を披露し正体をばらすというお馴染みの結末。最後は「これにて一件落着！」というキメ台詞まで・・・

さてその金さんの『入れ墨』、明治中期の書物によると、「二の腕から肩にかけて彫り物があつたが、それは桜吹雪ではなく髪を振り乱しふみをくわえた美人の『生首』であつた」とあります。汗 真偽は定かではありませんが、実際、金さんは夏場も長袖の下着を付けていたらしく、そこから色んな憶測をよんだのでしょう。ではその頃の町奉行に『遊び人』を気取つてゐる暇があつたかですが、今という東京都知事と東京地裁の所長と警視總監を併せたような激務そんな暇はなかつたはず。汗 ただ、『遊び人説』の発端は、家の複雑な跡目事情からか若い金さんには十年ほどべールに包まれた時期がありました。そこから『入れ墨』や『遊び人』などのストーリーが生まれたかもしれません。

さて、遠山金四郎という人が、これほど人気者になつたのは何故か？それは時の老中、水野忠邦の「天保の改革」にありました。財政立て直しの為、贅沢は敵と、庶民の暮らしを徹底的に規制したのですが、これに輪をかけたのが南町奉行の鳥居耀藏。上司受けしたかったのか、彼は歌舞伎役者を江戸から追放したり、作家や絵師を処罰したり、釣り、花火、将棋まで規制しました。かたや目をつぶってくれたのが我らが金さんこと北町奉行遠山金四郎。その頃、北町奉行と南町奉行は、一ヶ月交替で取締りをしていたので、庶民たちは「南町の鳥居様より、北町の金さんの方がいいや！」となつたようです。特に、大火で焼けた芝居小屋を全廃しようとした老中に対し、浅草に移転させることでまゐるく収めた金さんに芸能関係者はいたく感謝し、「遠山の金さん」の演目を上演した事で、一躍ヒーローとなつていったようです・・・これにて一件落着！

「老老介護」「認認介護」の実態

先日、地域の訪問医療の担い手であった医師が老老介護の家族に散弾銃で撃たれ死亡するという痛ましい事件がありました。今回、社会問題となっている『老老介護』また『認認介護』についてその実態を調べてみる事にしました。

『老老介護』とは65歳以上の配偶者や親を65歳以上の家族が介護している状態の事をいいます。最近の調査では『老老介護』世帯は介護を必要とする世帯の54%を超えるそうです。なかでも深刻なのが『認認介護』。聞き慣れない言葉ですが、介護が必要になる一番の理由が認知症という実態のなかで、認知症の人を認知症の家族が介護している『認認介護』は、当然ありうる事でしょう。80歳～84歳の認知症発症率が21.8%という数字から推測して、その年代の『認認介護率』を11組に1組としている文献もあります。しかし残念ながら、これだけでは留まらず、MC1という軽度認知障害者を含めると、65歳以上の夫婦の6組に1組が『認認介護』を余儀なくされ、年々増加しているのが実態です。汗 『認認介護』の悲惨さは想像に余りあります。施設に入るお金がない。他人にみてもらいたくない。子どもがいても晩婚化で子育てと重なり介護できない。などその理由は様々ですが、心身ともに疲弊し、介護鬱など抱えながら社会から孤立していく『老老介護』『認認介護』の高齢者たち。共倒れや介護放棄、介護殺人などを防ぐために社会全体が待ったなし！の状況になっています。

「花嫁の髪型」

ロビーに飾られたお雛様の髪型は、「おすべらかし」ですが、庶民である我々花嫁の髪型は、つい最近まで「文金高島田」が一般的でした。とはいっても江戸時代までは、上流社会のお姫さまだけが結える髪型だったようです。

さて大正時代まで地毛で結っていた「文金高島田」に大きな変革が起こります。かつらの老舗、東京銀座「かつら岡米」の岡田米蔵氏によると、かつらが婚礼で一般に使われるようになったのは、大正時代末期から昭和初期に執り行われた、住吉にある会社の社長令嬢の結婚式からだったようです。挙式は洋式で済まし、お色直しで文金高島田で登場。その艶やかな文金高島田の花嫁姿に列席した人は驚嘆するとともに、着替え含めて2～30分での花嫁の登場にビックリ！。当時は、自髪で結うのが普通だったので、この変身ぶりは新聞にも掲載され、一般に広がったとあります。しかし今では「文金高島田」に代わり「洋髪」と言われる地毛で結う髪型が主流となってきています。

